Veritas No.25(2004.3.17)

目次　　（敬称略）

＜卒業生の皆さんと新入生の皆さんへ＞
浜下　昌宏

＜図書館と私　卒業生特集＞
竹内　理恵（英文学科）
井坂　沙織（総合文化学科）
青野　みさ（音楽研究科）
門口　弘枝（文学研究科）
川崎　弥生（人間科学研究科）

＜研究室から＞
西田　昌司
許　羅莎
Frances Devlin-Glass

＜オルチン文庫にある「讃美歌集」について　その八＞
茂　　洋

＜図書館からのお知らせ＞
無断転載を禁ず

＜卒業生の皆さんと新入生の皆さんへ＞

浜下　昌宏　図書館長　文学部総合文化学科教授

私も老域（？）に入りつつあるが、老化の効用のひとつは別れに涙することが不要になることであろう。別離癖などという表現はないとしても、毎年 3 月は卒業生を送る。卒業式で壇上の椅子に座って式の間にうつむいてもいようものなら、後で卒業生たちから「先生は式の最中に眠っていたでしょう！？」と詰問されたりするが、「いいえ、涙を隠すために下を向いていたのです」と答えることにしている。幸い、私ども教員、そして職員は、良い学生たちに恵まれてきたように思う。「いざ我れも浮世の中に交りなむ去年の古巣を今日立ち出でて」（良寛）という覚悟で卒業生は旅立って欲しい。「見送りましょとて浜まで出たが　泣けてさらばが言えなんだ」（越後甚句）。とまれ、もう一度卒業する皆さんに訴えたい、在学中にどれくらい本が読めましたか、と。学生時代にしか読めないような長編を、たとえばドストエフスキー『カラマゾフの兄弟』とか、ゲーテ『ファウスト』とか、紫式部『源氏物語』を読破しましたか？　残念なことに、本を読むことが特別な時代になってしまったようである。インターネットの情報はパソコンでもケータイ電話でも容易に手に入り、そして時間に追われ雑務にせかされて落ち付いて大きな夢のある仕事に取り組めない時代。おそらく皆さんには大学生の間にし残したことが山ほどあるのだろう。しかし後悔はしないで欲しい。これからの人生もまた長い道のりなのだから、長編小説を読むくらいの時間はやがて手に入るだろう。――そしてひと月もたたぬうちに、私どもはやがて新入生を迎える。新たに本学に入ってくる皆さんの学生生活が実り多いものであることを祈りたい。しかし、欲張ってはいけない。大きな望みと小さな望みとをうまく使い分けよう。宮沢賢治は友人（母木光）宛に書いている。「全くさびしくてたまらず/ 美しいものがほしくてたまらず/ ただ幾人かの完全な同感者から/ 「あれはさうですね。」/ といふやうなことを、/ ぽつんと云はれるくらいが/ まづ/ のぞみといふところです。」人生は阪神タイガースのような勝ち方は必要としないから、”開幕ダッシュ”などは考えないこと。まずは、岡田山キャンパスの散歩から始めてごらんなさい。散歩の途中で図書館本館、そして新館を、ひやかし気分でのぞいてくださいな。

Shakespeare Garden より新館を望む

＜図書館と私　卒業生特集＞

●日常生活の積み重ねから

竹内　理恵　文学部英文学科

私の図書館通いの始まりは、一人暮らしの部屋に帰って宿題をするのが嫌で、できるだけ図書館で終わらせるようにしたのがきっかけです。入学して仲良くなったクラスメイトと、いっしょに予習をしたり、休日の予定を立てたりするのにも図書館を利用しました。また、パソコンを使うのに慣れていったので、卒業論文作成する頃には、情報を早く得ることができるようになりました。

大抵の学生は、卒論を作成するときに頻繁に図書館を利用するようになります。卒論は、十分な情報がないと書けません。いくら悩んでも、自分の引き出しを全て引っ張り出して書いても、内容の薄い論文になってしまいます。実際、私がそうでした。卒論で取り上げる内容がぼんやりとしか決まらず、空回りしていた私に、ゼミの先生がおっしゃいました。「神戸女学院の図書館に一日籠ってみなさい。必ずヒントが見つかるはず！」

そして、私は初めて一日図書館に籠って、調べてみることにしました。頭の中にあるぼんやりとした考えを言葉にし、各階にあるパソコンに打ち込み、本を検索しました。すると私の卒論の題材となるシェイクスピアの作品とは別に、違う分野の本もたくさん表示されました。卒論のテーマに合い、読んでみたいと思える本は、両手に収まりきらないほどたくさんありました。大きな机を一人で占領し、順に読んでいきました。読み終えた後、これまでぼんやりとしかなかったテーマがはっきりし、書きたい内容が頭にいくつも浮かんできました。普通なら、この作業は苦痛に思えるのかもしれません。しかし、私にとって苦痛ではなく、むしろ楽しいと思えました。こう思えたのは、１回生の頃からこの図書館を頻繁に利用し、それが習慣になり、図書館で勉強することが好きだったからです。また、この図書館には私達の研究に役立つ専門的な本がどの図書館よりも多いと感じたからだと思います。

１回生からの何気ない日常生活の積み重ねが、卒論を早く仕上げるのに役立ったと、今実感しています。新入生の皆さんには「卒論」、と聞いてもピンとこないと思いますが、２・３年後のためにも、今のうちからどんどん図書館を利用することをお勧めします。

●図書館と私

井坂　沙織　文学部総合文化学科

図書館本館からぼんやりと中庭を眺めていると、ふと、かつて暗唱した詩や句が心に浮かんでくる事がある。当時は漠然としか掴めていなかった意味が、時と経験とを重ねて、より明確に理解できるようになった事に気が付く。ぼやけて見えていた世界が、極僅かな言葉の組み合わせで、突如くっきりと輪郭を現してくる時の驚き。私と言葉と世界が、ぴたりと重なり合う瞬間。それは、カメラで捉えた対象と焦点が合い、目に映る世界が急に生き生きする瞬間の驚きに似ている。そのような驚きは、何気無い日常に喜びを与えてくれる。

神戸女学院大学の図書館は、その美しさと深遠な愛故に、そこで学ぶ者を感化し続けるだろう。そして、そこで出会った本や言葉は、生涯私達を奥深いところでしっかりと支え、時に慰め、励ましてくれるだろう。

●音楽学部図書室

青野　みさ　音楽研究科

音楽を専攻する学生にとって、「図書館へ行く」と言えば、その大半が「音楽学部図書室」の事です。

音楽学部図書室には多くの楽譜、音楽に関わる文献や図書の他に、レコードやＣＤ、ＬＤなども豊富で、自由に鑑賞する事ができ、私にとっては勉強するための貴重な場所の１つであったと言えます。楽譜というものは数多くの出版社から出版されていますが、同じ曲でも運指法やペダリングが異なるので、新しい曲を勉強する時には、図書室に行って、原典版をはじめ多くの楽譜に目を通す事は演奏する上で欠かせません。また同じ曲でも、奏者によって解釈は様々です。自分なりの解釈に行き詰まった時には図書室に行き、レコードやＣＤなど、あらゆる奏者の演奏を聞き比べ、そこからヒントを貰います。

私は学部生として、音楽研修生として、また大学院生として、神戸女学院には７年間通いましたが、学部入学時から比べると、音楽学部図書室は年々便利になってきており、近頃ではＣＤのデータ管理化に頑張っておられるようです。司書の方々はいつも笑顔で迎えてくださり、またわからない事がある時は、とても優しく丁寧に教えてくださるので、図書室に行くと、学生が勉強するために、より良い環境を提供して下さっていることを改めて実感します。

私は音楽研究科の 3 期生にあたりますが、大学院が設置されてまだ間もない事もあり、文学研究科や人間科学研究科に比べ、神戸女学院の図書館には、修士論文を書くために必要な資料がまだ少ないように思います。そのため、必要な度に相互利用請求をしていたので、新館の司書の方々には多大なご迷惑をかけた事と思いますが、これからの学生の方々のためにも、少しでも多くの資料が揃う事を願っております。

音楽学部図書室では、在校生だけでなく、卒業生の方々とも良くお会いします。多くの楽譜を一度に見る事ができ、また多くの録音資料を聴く事ができるというのは、学生だけでなく、音楽を勉強する者にとって大変貴重な場所です。今春、私は神戸女学院を卒業しますが、卒業後も、この音楽学部図書室に足を運びたいと思います。

〝VERITAS LIBERABIT VOS〟

真理はあなたたちを自由にする　図書館新館エントランスホール

●図書館から学んだこと

門口　弘枝　文学研究科英文学専攻

神戸女学院大学の図書館は、「真理はあなたたちを自由にする」という標語を掲げている。この言葉は、真理を求めるためには広い視野が必要であることを教えてくれた。そのために必要な「知る権利」の意義を、神戸女学院大学の図書館で学んだように思う。女学院の図書館では、学生が書庫の本を閲覧する時は、カウンターで手続きをすると係りの方が取りに行ってくださることになっている。読みたい本のためとはいえ、その都度労力をお願いするわけだから、慣れるまでは少し煩わしいものであった。確実に必要な本だという自信のある時はよいが、そうでない時は、自分で見に行けたらいいのに‥‥と思ったりもした。しかし、いつも嫌な顔一つせずに本を取りに行ってくださる図書館員の方々のおかげで、図書館では、自分に必要な書物を読む権利が保障されることを理解した。当然のことなのかもしれないが、その役割を思う度に図書館の意義をずしりと感じるのである。

というのは、大学図書館には専門的な研究書が数多く所蔵されている。始めは、自分に

は無縁の遠いところにあるもののように思えてならなかった書物であるが、学年が進むにつれてそれらの専門書に接する機会は増えていった。図書館へ行き、莫大な数の蔵書に接する度に、世界は広く、多様な思想が無限に存在することを思い知った。これらの書物を所蔵する図書館を通して、果てしなく広がる知の大海に接していることを理解したとき、大学で、そして大学図書館で勉強できることをとても誇らしく思った。

●図書館と私

川崎　弥生　人間科学研究科

私は昔から本を読むのが大好きで、学校の図書館も地域の図書館にもよく行っていた。同じ図書館だが、大学の図書館は私にとって、利用の目的も借りる本の種類も、それまで利用した図書館とは全然違っていた。大学に入学するまでは、好きな小説を借りたり、大学受験のために自習室に通った図書館。それが、大学の図書館になると、授業のレポートや試験のために、専門書を探し出し、事項を調べる場所になった。たくさんの蔵書の中から関連する文献を自分なりの基準で吟味して選び出し、閲覧用の机に積んで、複数の書物からレポートに関連しそうなことを抽出したり、定義が分からない用語を調べたりした。まさに、私にとって図書館は知識を増やす場所であった。女学院の図書館(新館)には、６人がけのテーブル席だけではなく、家の学習机のようにライトのついた個別の机がある。学部生であった私にとって、その机は特別な存在で、そこに座って調べものをしていると、なんだか研究者の卵になれたようで嬉しかった。院生になって、ますます図書館は大切なものになった。私の研究領域の雑誌はあまり大学の図書館にはなかったので、他の大学から論文を取り寄せることが多かった。すぐに手に入らないもどかしさがあるが、「そろそろ来ているかな～」と相互利用のコーナーを見に行った時に、到着の案内があると、とても嬉しくて、ウキウキとした気分で、カウンターに取りに行った。修士論文や投稿論文の審査中といったように締め切りがあり、切羽詰っている時はさすがに、「早く来ないのか！！」とイライラすることもあったが、今となってはそれも良い思い出である。私が卒業論文、修士論文、博士論文を執筆できたのは、図書館の支えがあったからだと思う。本当に感謝しているし、これからも、お世話になることだろう

＜研究室から＞

●私の研究スタイルの変遷

西田　昌司　人間科学部教授

私ほど図書館を利用しない大学教員もいないだろう。これは修辞学上の技法でも何でもなく、まさに事実である。たしかに神戸市の人工島にすむ住人としては、神戸市立図書館や地域の図書館の利用カードを持ち、大いに公共の文化施設を利用させてもらっている。ちなみに神戸の図書館は強力にネットワーク化されており、どの図書館の蔵書でも近所の図書館で検索して借り出すことが出来るし、どこに返却してもよい。おかげで話題作には事欠かない。

しかし、研究での図書館利用となると、あまり縁がなくなりつつある。私が研究を始めたおよそ３０年前には、大学の図書館で毎週、新着雑誌の論文に目を通し、ノートにメモをとった。また実験に必要な先行論文を Chemical Abstract という index 雑誌で検索した。この情報量が生半可ではなく、Chemical Abstract の abstract が定期的に刊行されていた。約１５年前、米国で研究する機会を得た。当時の米国ではコンピューターを使った様々なデータベースが作られ始めていた。図書館にいくと何枚もの CD-ROM をセットしたり、大型のハードディスクを備えたりしたコンピューターが設置され、古今東西の研究論文が画面の上で検索可能であった。また全国にまたがるネットワーク構築も積極的に進められており、ネットワーク経由でデータベースにアクセスできるようになった。安い電話料金も相まって、自宅から研究に必要な論文を探すことも出来るようになった。しかし、まだ、最新刊の雑誌をぱらぱらとめくる楽しみは残っていたし、実際の論文を手に入れるには図書館に行かなければならなかった。

状況が決定的に変わったのは、いわゆるブロードバンド化で情報通信の容量が劇的に進歩してからだ。ここ数年間、図書館に足を向けなくなりつつある。有名な医学、生物学系の学術雑誌はほぼ全てが Medline というデータベースに登録され、論文が受理されると同時に、刊行以前から論文をネット上で公開するようになった。ネット媒体として雑誌を購読することも出来るし、有力な（経済力のある）雑誌は無料で論文をネットワークから閲覧することが出来る。最近の私の研究スタイルは、２４時間いつでもネットワークにアクセスし、必要な文献を検索して情報をダウンロードする。実際に論文を読む必要があるときにもネットワーク経由で論文を読む。私が図書館に行くのは、はるか昔の論文（データベース化されていない）か、経済力のない雑誌の論文（無料ではネットワークから閲覧できない）を、実際に雑誌を持っている図書館にコピーしてもらうように依頼するときだけ。

もちろんこれは限られた分野の、あまり勉強しない研究者の一例に過ぎない。研究のために「情報」のみを入手するのは味気ない。図書館の雰囲気や印刷のにおいなど、いずれもが研究のモチベーションとなろう。また、データベース化しえない様々な情報が図書館の所蔵物の中には眠っている。学生の勉学や情報収集技術の習得場所として専門書を備えた図書館の重要性は言うまでもない。しかし蔵書整理に苦労されている職員の方々を見るにつけ、一次資料としての貴重な収蔵物とそれ以外の爆発的に増え続ける電子化可能な学術情報との峻別を、いつか真剣に考えなければならない日が来るであろうとの思いを強くする。以上、古典を持たない悲しい研究分野からの現状報告である。

●【11】と【1】

許　羅莎　客員研究員　広東外語外貿大学

私は「１」という数字と縁があるかもしれません。タイトルの数字は私が日本に滞在した時間のことです。

1984 年の夏、中国のあるテレビ工場の通訳として、大阪府の茨木にある松下電器に１ヶ月。1985 年の冬、中国の大学の教員として、日本文部科学省（当時、文部省）のご招待で、関東・関西を、日本語教員研修旅行１ヶ月。1987 年の夏から 11 年間にもわたる日本留学、場所は関東地方。今回、客員研究員として、2003 年の春から神戸女学院大学に 1 年間お世話になっております。

日本人の平均寿命は 80 歳ぐらいだと言われており、11 年間は人生の約 1/8 に当たります。11 年間のうち、日本人・日本語・日本文化をじっくり観察することができたと同時に、中国人・中国語・中国文化を改めて認識し、より客観的に見つめ直すことができるようにもなりました。念願の博士号を取得し、留学の終止符を打って、「完全撤退」をしたのは、1998 年の夏でした。中国での就職先は広東外語外貿大学日本語学部です。その前身は広州外国語学院（大学）日本語学科でした。11 年ぶりに中国の大学の空気を吸って、何もかも新鮮で、分かっていることも、実はあまりよく分かっていないような毎日でした。

客員研究員の身分で、５年ぶりに来日、場所は関西地方。神戸女学院大学での貴重な１年間は、私にとって意味は大きかったです。研究の面では、共著『標準日語会話教程 中級上・下（試作品）』は完成（二冊とも広東外語外貿大学日本語学部で試用中）、単著『現代日語感情語彙研究』は 2004 年出版予定。研究生活のかたわら、目一杯旅行もしました。

夏は、四日間で走行距離 1000 キロも走った北海道でのドライブ、歴史的人物が多数生まれた兵庫県出石の旅。秋は、世界遺産めぐりで、鹿児島県の屋久島、岐阜県白川郷の合掌造り、京都の三千院。冬は、三重県の伊勢神宮などなど。色々な体験を通して、日本人・日本語・日本文化を再認識することができ、実に収穫の多い一年でした。

ありがとうございました！神戸女学院大学！
2004 年３月、中国の広州に戻ります。今後ともよろしくお願い致します。

文学館２８号室入口のシェークスピア胸像

文学館２８号室入口には嘗て、本学第４回卒業生であり同窓会会長も勤めた塚本ふじ氏より岡田山キャンパス移転に際して贈られたシェークスピア胸像が置かれていたが、この像は１９９５年１月１７日の阪神淡路大震災により破損した。現在置かれている胸像は、震災当時米国・デューク大学より文学部英文学科に赴任中であった Victor Strandberg 客員教授より帰国後贈られたものである。

●Collaborative Learning Acquires a New Meaning

Frances Devlin-Glass　文学部英文学科客員教授
Visiting Megumikai Professor of English Literature, School of Letters, Kobe College.

As someone deeply interested in pedagogy, I have acquired a deeper understanding since arriving at Kobe College about how Japanese culture enables and enhances a richer kind of collaborative learning than is dreamed of in the west, or at least in my culture, Australia, where there is much rhetoric about the benefits of collaboration, but not nearly as much practice of it.

My teaching style is quite forensic : I like to provide data, and then to ask questions of it, and to get students interacting with one another as well as with myself. I found this technique, which has always worked well for me at home in Australian universities, was not so effective in Japan, where students did not initially trust that the questions were indeed open ones. For a start, many of my students were unused to working exclusively in English; my questions were too many and too complex; students were very adept at refusing to meet my eye; or if asked directly and by name, to simply not answer, and sometimes they did not listen very carefully to one another' s answers because they were privileging mine. For a time, it was quite disconcerting. I wished I had been better prepared for these difficulties, and would recommend Brian McVeigh' s very critical book on Japanese education, Japanese Higher Education as Myth (2002) to foreign language teachers in my situation. It is, however, a bleak book which does more to analyse the problem than solve it.

When I realized, with help from colleagues (especially Cohen-sensei and Seton-sensei, both experienced and gifted teachers of English), that the students worked better in teams, their learning became much more efficient and secure. It meant that those less confident in English were able to ask the more fluent to translate. They were free to mix Japanese and English in ways that put the subject of enquiry ahead of the problem of language. Lack of familiarity with English became less of an impediment, and gradually they learned to understand how useful cross-cultural comparisons can be as a methodology for understanding. It is always exciting, in any culture, to find students questioning the bases of what they consider to be 'natural' and fundamental. I found, though, that I needed to monitor group presentations because misunderstandings could easily be compounded, as for example in the group which did not realize that Aborigines was a generic noun, used sometimes by indigenous groups other than Australian indigenous people. They had found information about an indigenous Canadian community which they mistakenly thought was an Australian group. Similarly, if students understood that I actually

encouraged stronger students to assist weaker ones, provided their final product (essay or journal) was completed independently, the work was done well and with integrity.

Assessment in two of my courses at Kobe College involved students in keeping quite extensive reading/learning journals, which encouraged students to write in English more than they normally might (at least half a page per week), and before class. I found these journals a really useful assessment instrument. It took some persuasion for them to complete this work prior to class and to revise it in the light of class discussion, focusing not on what was said but on the meta-cognitive issues. (What did I miss and why? How does English do this differently from Japanese?) I wished in retrospect that I had set up more of the learning challenges week by week as group exercises. I believe it would have increased the quality of the journals for the less confident students. It was challenging, too, to persuade students that their mistakes could become portals of discovery and were interesting in themselves to think about. Those who understood the metacognitive aspect of the journal did some remarkable and independent work.

One of the most interesting classes I taught at Kobe College was in Feminist Re-readings of Creation Myths. I taught extracts from Sumerian, Judaeo-Christian, Irish and Australian myths, and we used this basis to question how Kojiki constructed meaning for Japanese culture. It was very illuminating not only for me but for students to find the answers to questions about aspects of their culture that they took for granted, about for example, how the myths institutionalize gender differences, or treat the body, or the landscape, and why it is that Shinto has survived alongside Buddhism and Christianity, whereas exclusivist monotheisms are more common in the west.

Another pedagogical challenge was how to workshop the notion of critique of sources in the Advanced Writing course (for Juniors), and to help the students understand the difference between a content-rich course and a process-oriented one. Each student in this course was required to mock up a

research thesis in outline: to devise main hypotheses and sub-questions, to find relevant sources, put together a bibliography for at least one sub-question, annotate it, identify the schools of thought from which it emanates (a task that proved too difficult for most; however, there were some very fine examples of high level competence in this area), and note the strengths and weaknesses several books, as well as begin to write a section. It was the critique requirement (documenting limitations, biases, silences in data/argument) which generated most heat, and eventually light, for the students. Again, work-shopping, this time in a class of 25, was an effective method, and they proved attentive to one another's needs. Reticence about one's subject of enquiry being scrutinized by so many of one's peers was overcome by watching others profit from the collaborative advice of their peers. It was hardest for those who volunteered early in the process, though to some extent I was able to socially engineer that the exercises that would be most generally useful were work- shopped first, and to track for the class how revisions were proceeding.

I am not sure where the training to work in collaborative teams begins in Japan, and it may well be in kindergarten, or among siblings in families. However, it was powerfully in evidence in two extra-curricula events in which I participated. A group of undergraduates in the English Drama Club mounted a full-scale Disney musical, Beauty and the Beast. Rehearsals were an inspiration. The director was a young undergraduate, an impressively energetic woman, as were most of the performers. Scenes were rehearsed three times in quick succession with feedback sessions between each iteration, and long, focused discussions at the end of each rehearsal period. Attention to feedback was intense and noted point by point, sentence by sentence. This feedback was reflected immediately in the next version of the scene, and so refinements occurred progressively and were reinforced. At one stage, a single two-day rehearsal weekend pulled the whole choreography of the piece into place, an extraordinary achievement, which spoke volumes about the focus of the group, and their commitment. Rarely did I notice any performer, even the most menial, absent himself or herself from the rehearsals, and I was attending only one of the three or four per week. The students seemed to understand that to be involved was an absolute commitment to the group, and not an optional individual commitment. I have

worked with professional actors on productions for many years, and the Kobe group was remarkably different in that I never once saw anything that resembled nerves, reserve or what I think of as prima-donna behaviour. There were stars, but everyone had a sense of his/her importance in the show. Even the lighting man, who had no work to do until the last week, attended every rehearsal. The circumstances under which rehearsals proceeded were also an inspiration: the only space available were the spaces around stairwells at Kwansai Gakuin (and very occasionally a comparatively luxurious space at Kobe College). In those stairwells, there was very noisy competition from rap-groups and dancing clubs (with loud music). Not only did they accept this far-from-ideal environment, but they embraced it, even made a virtue of it, saying on many occasions that it forced them to project their voices. The sight of them warming up on the balconies and yelling with huge diaphragm-breaths into the square below is one that I will not quickly forget. There were, I think, only two rehearsals in the theatre space. This group is one that warrants study, I believe, and would make an excellent site for doing higher degree research on collaborative learning. I interviewed members of the group subsequently to try to understand more about their processes and their thinking about them, but I felt there was much more to learn about them and that one would need Japanese to do it well.

The second theatrical event I experienced was bringing together a theatricalisation of James Joyce' s novel, Ulysses, for Bloomsday in Kobe. Serious demands were made of very busy students: they had to learn to read one of the most demanding works in English Literature, and it was clear that they did understand their passages; they had to work as equals with teachers, and while this was not easy or natural for them, they did it with grace and ease; and some of them were required to act roles that were far beyond their normal repertoire of behaviours. I was amazed by some of the performances: young women whom I had protected in casting because I assumed they were extremely shy, produced some of the very most astonishingly extrovert performances. I cannot imagine the level of personal determination that this entailed. Invariably it was their ability to work, without ego and taking a lot of directions with complete precision and accuracy, in small groups, and to bounce ideas off one another, that in the end enabled these personally risky performances. This was done with a short

rehearsal period of one month. I was personally very much supported in my variety of roles: scripting, direction, publicity, props and costume creation, not only by the student performers but also staff from the English Department, both academic and administrative (Yamada-san). Chief of the faculty members who were supportive was Cohen-sensei, whose energy and aesthetic input were prodigious, and Hijiya-sensei, Seton-sensei and Maeker-sensei made wonderful contributions on the acting and teaching/learning fronts. The students will find themselves commemorated in a film documentary on international Bloomsdays being released this year by Fritzi Films. Ulysses in yukata is newsworthy!

My research interests in Joyce and his readers (including Bloomsday performers) have taken me into an extraordinary reading circle in Kyoto, of mainly academics, which has been meeting for a whole day a month for 20 years. Again, the discussion is conducted collaboratively, non-competitively, and is very focused. A few paragraphs a month are read, translated, discussed, references sought and debated. It is clear that younger members are sustained by more experienced members in a long-term commitment driven simply by the need to understand James Joyce more deeply. No-one need feel a failure in this group because its raison d' etre is learning by sharing difficulties.

I envy these collaborative practices and hope to encourage them in a more systematic way in my own culture on my return. Thank you, students and colleagues, for teaching me some aspects of how you learn.

＜オルチン文庫にある「讃美歌集」について　そのハ＞

茂　　洋　本学名誉教授

いよいよ日本の讃美歌集の中でも、最高傑作と呼ばれている『新撰讃美歌』を説明しましょう。Veritas 17 の「各教派別の讃美歌の流れ」を見てください。『新撰讃美歌』（６２，６９）に、それまでの「讃美歌集」が集約されているのが、お分かりになるでしょう。

この『新撰讃美歌』には、歌２６３、頌栄１１そして讃詠１２が収められています。はじめに出版された時（明治二十一年、１８８８）（オルチン文庫整理番号６２）は歌詞のみで、楽譜はまだ出来上がっていませんでした。二年後の明治二十三年（１８９０）十二月、楽譜付き『新撰讃美歌』（オルチン文庫６９）が発行されました。

『新撰讃美歌』（６９）の序文に、これらの讃美歌は、四種類から成り立っていると記されています。その第一は、それまですでに発行されていた組合教会の讃美歌集と、一致教会の讃美歌集から採られて、手を加えられたもの、第二は、他の教派の教会が出した讃美歌集から選んだもの、第三は、英語の讃美歌集から翻訳したもの、そして最後の第四は委員の新作によるものであるというのです。そのうち、第三と第四が多数を占めていると記されています。

しかし実際には、一つ一つの讃美歌が、四種類のどれにあたるのか判定することは、なかなか難しいのです。たとえば、第一のグループに属している讃美歌をみてみましょう。いままで述べてきたように、それまですでに発行されていた組合教会の讃美歌集は、少なくとも五つあって、一致教会の讃美歌集も、少なくとも四つあります。明治七年（１８７４）日本のプロテスタントの各教派が、それぞれ讃美歌集を発行してから、それぞれ手を加えたり、他の教派と交流しながら讃美歌集を作り上げてきました。なかでも、組合教会と一致教会との讃美歌集編纂についての協力は強かったのです。お互いに交流しながら、それぞれの教派が、別々の讃美歌集を発行してきました。組合教会側では、『無題』（明治七年、１８７４）（０６）からはじまって、『無題』（明治七年、１８７４）（０９）、『三びのうた』（明治八年、１８７５）（１１）、『さんびのうた』（明治十二年、１８７９）（１３）、そして『讃美歌并楽譜』（明治十五年、１８８２）（１５）まで、少なくとも五冊の讃美歌集を発行しました。一方、一致教会側は、『教のうた』（明治七年、１８７４）（２０）からはじまって、『讃美歌』（明治七年、１８７４）（２１）、『改正讃美歌』（明治九年、１８７６）（２２）、『讃美歌　全』（明治十四年、１８８１）（２４）など少なくとも四冊の讃美歌

集を発行したことになります。

ですから、この『新撰讃美歌』（６２、６９）にもっとも強く影響を及ぼした讃美歌集は、２４の『讃美歌　全』（明治十四年、１８８１）と、１５の『讃美歌并楽譜』（明治十五年、１８８２）であることは、当然ですが、歌詞にかなり手が加えられていることが多く、ときにはその原形を殆どとどめていないものもあるくらいです。また作者がはっきりしているものもありますが、なかには作者なのか、訳者なのか判断の難しいものも多いのです。それにこれら二つの教派が、よく協力しているけれども、それでも微妙な違いがあって、讃美歌だけではなく、詞においても、取捨選択が行われています。その上、作者もしくは訳者の記名がありません。幸いにも書き込みのある讃美歌がいくつかあるので、そこから作者や訳者を類推することができます。ただしその書き込みの信憑性は、問題として残ることになります。この点については、『新撰讃美歌資料集』を参照して下さい。

第二の場合をみると、メソヂスト教会とバプテスト教会と聖公会の讃美歌集からの影響が強いのです。メソヂスト教会の場合は、とくに『譜附　基督教聖歌集』（明治十七年、１８８４）（３１）から、バプテスト教会の場合は、とくに　『基督教讃美歌』（明治十九年、１８８６）（４０）から、そして聖公会の場合は、　『聖公會歌集』（明治十六年、１８８３（５０）から採られている場合が多いのです。しかしこれら他の讃美歌をほぼそのまま採用している場合は、あまり問題にはならないのですが、大幅に手を加えて、元の姿が殆ど見られないほどにまでなった讃美歌の場合は、果たして元の讃美歌に手を加えたものなのか、新作なのか判断が難しいのです。

ただ『聖公会歌集』（５０）の場合、このたび神戸女学院で発見された、松山高吉の書き込みによって改訂した『聖公会歌集』から、『新撰讃美歌』（６２、６９）に採用されたものや、採用されなっかったものや、さらに手が加えられて採用されたもののあることがわかりました。この点については、「『新撰讃美歌』研究」の第一の論文を参照して下さい。

第三の場合には、６９の楽譜付き『新撰讃美歌』の発行されるまでに出版されていた英語の讃美歌集十一冊にあたり、その原詞を探り当てました。ただそれが妥当かどうかなお問題もありますが、さらに重要な問題は、その原詞がどの程度正確に訳されているかです。語学上の問題もさることながら、もっとむずかしい点は、信仰上の解釈の違いです。その上、詞の制約もあるので、訳の詞となっていても、原詞とはおおよそ別の詞となっている讃美歌もあります。この点も、「『新撰讃美歌』研究」の第二の論文を御覧下さい。

第四の新作の場合は、比較的わかりやすいのです。『七一雑報』、『基督教新聞』、『女学雑誌』に掲載されたものや、書き込みから明らかに新作とわかるものもありましたが、新作と決められないものも数多くありました。しかしここでも、新作の讃美歌とされながら、

英語の讃美歌にその原詞らしいものの見つかることもありました。
　歌詞だけではなくて、曲名も問題となります。英語讃美歌からの場合、曲名が同じの讃美歌もあるのですが、なかには全く異なる曲をあてている場合もあります。またそれ迄の日本の讃美歌で、用いられていた曲とは違う曲を用いていることも多いのです。詞の字数の変化によるものもありますが、何らかの理由で変えられていることも多いのです。さらに同じ曲でありながら、曲名の異なるものもありました。

　この『新撰讃美歌』作成のため努力された主立った人たちは、松山高吉氏（組合教会側）と奥野昌綱氏（一致教会側）と植村正久氏（一致教会側）、それに楽譜作成の責任を採られたジオルド・オルチン氏（組合教会側）でした。

　この『新撰讃美歌』研究のためには、『新撰讃美歌資料集』（神戸女学院『新撰讃美歌』研究会発行、１９９３）、「『新撰讃美歌』研究」（新教出版社発行、１９９９）と下山嬢子『新撰讃美歌』、新日本古典文学大系　明治編１２（岩波書店発行、２００１）があります。

これは『新撰讃美歌』（１８８０年　明治２３年）（６９）の表紙。
はじめて、五線紙の楽譜が活版で印刷された讃美歌集。

＜図書館からのお知らせ＞

●CD-ROM で山本通キャンパス時代の写真をご覧いただけるようになりました

　今年度、図書館では所蔵資料の中から、明治８年（１８７５）の創立から昭和８年（１９３３）に現在の西宮・岡田山キャンパスに移転するまでの写真約７３０枚を収録したCD-ROM を作成いたしました。原版はかなり劣化の進んでいるものもあり、こうして保存と利用のために資料のマイクロ・デジタル化を講じることが出来たことを幸いに思います。

今は図書館本館ロビーに模型が残るのみの神戸・山本通キャンパスの様子や授業・行事の風景、先生や学生たちの集合写真、卒業生たちからに折にふれ送られてきた近況報告の写真など、内容は多岐に渡っています。現キャンパス内の建造物にそのお名前をいただいている旧師のお姿を見ることもできます。時代を映す貴重なショットの数々、図書館本館２階カウンターでお申し込みの上、是非一度ご覧になってみてください。

来年度は岡田山キャンパス移転後の写真資料のデジタル化に取りかかる予定です。また、２００５年の創立１３０周年に向けて資料展示の充実にも努めて行きたいと考えています。

明治２０年代の主な校舎